赤川先生を偲んで

理学部７回生　林　市雄

１．まえがき

赤川先生ほど、老師に対する変わらぬ敬愛の念と愛弟子に対するお優しい眼差しを何時までもお持ちになっておられたお方は、少ないのではないだろうか。

この春、坂口忠司先生からお電話で、赤川浩爾先生の追悼、思い出などを、先生とプライベートな面で、比較的接触の多かった私にも書くように、とのご依頼があって、大変僭越ながら、筆を執ることになった。

先生のご経歴、学術的業績、大学での教育・行政の上で果たしてこられた数々の事項は既に多くの方々が文章にされていると思われますので、私は先生の身近で見聞した、先生のプライベートな面で感じたこと、忘れられない事を記さしていただくことにする。

２．老師に対して

私は、1959 年 4 月（昭和 34 年）本学理学部物理学科を卒業して、工学部機械工学科第五講座の中西研究室に研究生としてお世話になった。当時の赤川先生は、既に 中西 雄先生の下から独立した部屋（講座）をお持ちになっておられた。

旧制京都帝国大学をご卒業になり、学位もとられて、新制大学工学部ではご立派な経歴で、堂々たる新進気鋭の若手教授となっておられた。神戸大学工学部の前身は、ご存知の様に旧制高等工業、工業専門学校を経て、他の旧制高等教育を担っていた学校などと合併して出来た新制大学の工学部であった。全国の大学の工学部の殆どがそうであった。教官も旧高等工業専門学校からの方と帝国大学工学部を出られた方が混在していた。旧帝大出の先生の中には、自分は帝大出であることを、鼻に掛けるとまでは云えないまでも、時々そのような空気を感じさせるお方も居られた中で、赤川先生は工学部で最初に入られた第五講座の中西先生に対する、敬愛の念は一貫して変わることが無かった様にお見受けする。

当時はキャンパスに食堂も無く、殆どの教官、事務官、学生等は皆弁当持ちであった。昼食時になると、毎日、赤川先生は老師の中西先生の部屋に来られて、技官であった北詰八朗さんが入れられたお茶で、中西先生にその日のことや政治問題、社会問題などを話題にお弁当を使われていた。中西先生に対する日常の報告的な話題から、学内運営についての師のアドバイスを聞かれていたこともあった。その態度には、初めて工学部でお世話になったと云われる老師に対する敬愛の念が満ち溢れていて、ほのぼのとしたものが私たちにも伝わって来たものである。折から、後に全国に吹き荒れた学園紛争の芽が本学でも出始めて来た時であった。丁度改選の時に当たった学長選挙に対して、大学構成員である事務官、学生にも選挙権を与えよと学生が騒ぎ始めていた。投票日が近づくに連れて、学生

の運動もエスカレートして行った。　技官の北詰さんと私は、当日　中西先生が投票を阻止せんとする学生ともみ合いになったりして、お怪我でもされたら大変だと心配していたら、夕刻部屋に赤川先生が来られて、次いで、材料力学の講座のご担当であった山本 明先生も来られて、ご一緒に翌日の対応を話し合った。結論は、北詰さんと私が早く登校して、中西先生をエスコートする事になり、少し離れて、赤川先生と山本先生が見守る、と云う布陣が決まった。然し中味は何をどうエスコートするのか、“出たとこ勝負”であった。当日になり、二人が交代で門前に待機していたが、当日どうした事か、中西先生は何時もの時間に登校されず、どうなされたのであろうかと心配しながら、少し休憩を取るため部屋に帰り、お茶の支度をしていた。赤川先生も気が気でないご様子で、部屋に来られて、どうされたのかなあ？　とご心配顔であった。又行ってきますと北詰さんがドアーを開けるのと同時に、当の中西先生が入ってこられた。思わず部屋にいた全員が　先生！ と声を上げた。中西先生はきょとんとされて、どうしたのかね？　と聞き返された。恐る恐るご投票は？　とお聞きしたら、之又アッと云ってしまった。　中西先生によると、投票所に行ったら、学生が大勢入り口に居た。先生は、彼らに片手を挙げて、“君たち早くからご苦労！”と仰られたら、学生達は、“先生、お早う御座います、”と返し、さっと一人の学生が前に出て来て、“先生、ステッキをお持ちいたしています、”と、もう一人が“お鞄をお持ちしています、”もう一人が　“先生　此方へどうぞ、”と案内に立ち、投票が終わって出てきたら、鞄とステッキを渡して、”先生、ご苦労様でした、“と見送ってくれたよ、との事であった。その後中西先生は外出のご予定であったので、お茶の後、出ようとされていたら、別の先生が入って来られた。学生に押し問答の末腕力で阻止されて、ぶりぶり、怒り心頭と云った所であった。”中西先生はどうされましたか？“ とその先生が中西先生に、聞かれて、中西先生は先の事を話されたら、益々怒りが高ぶった感であった。中西先生も、怒り憤懣の先生も出て行かれて、後に残った赤川先生、山本先生、私たち講座の二人が、ほーッと一息をつき、”格が違うなあ、“と顔を見合わせてニヤッとした事である。

初めに入られた講座の先生よりも、資格が上に登られて、押しも押されぬお立場になられても、尚、初めに色々とお世話になった、と云うお気持ちの表れか、老師に対する敬愛の念は、お傍で拝見していても良く判ったことである。

３．赤川先生から教えられた技術上のこと

中西先生の下で勉強していた時には、直接技術的なこと、工学的なことで、ご指導をお受けすることはなかったが、学校を出て企業に入って、かれこれ 20 数年くらい経った時であったろうか、熱流体研究講座の担当教授でいらっしゃった坂口先生からのお話で、特別講義の一つであった、空調工学の講義を担当させて頂くことになって、大学に打ち合わせに行った折、赤川先生から色々とアドバイスを頂いた。講義全体の時間配分、集中講義のこと、などなどの他に、基礎的な学問が、実学である空調工学の実務の上で、どのように活用されていくのか、と云う例を一つでも、二つでも教えてあげて欲しいと。流体工学の学問から、空調で扱う配管、ダクト設計に至る過程などを実際の計算で示せば、基礎学問の必要性が良く理解できるであろうからと。このことは、特別講義のご担当教授であった坂口先生からも、是非手計算で（電卓くらいは使っても）一例位やっておいて欲しいとい

われていた事であった。熱力学の応用学でもあるので、エントロピー、エンタルピーの事をどのように講義の中で入れたら良いかと、お伺いしたりした。　此処で判った事は、エンタルピーは工学部門では“内部エネルギー”として扱われていたが、大変難しい、理学部物理学部門では、分子運動論と統計力学の面から熱力学を導き、一歩一歩高みに登って行く様に説かれていて大変分かりやすい。所が、エントロピーとなると、物理学的なアプローチでは理解が難しい、此方は蒸気工学を学んでいる機械工学系の人の方が理解が容易である。先生と両者の特性を加味した熱の扱い方を提唱せねばなりませんねなどと話し合ったのも懐かしい思い出である。

先生のご指導で何とか初年度の講義を終えて、次年度に備えて講義録を見直して行ったことである。丁度この頃、先生にとっての師であり、私にとっての大恩師である　中西先生のご容態が芳しく無いとお聞きして、お見舞に飛んで行き、赤川先生、 坂口先生のご指導の下に、空調工学の講義を担当させて頂いている旨病床の先生に報告させて頂いたら、大変お喜びの表情でお聞き頂いていた。

赤川先生に対して、大変残念ですと申し上げたいのは、叙勲の栄に浴された時、お祝い会の事は、固く辞退していると申されて、先輩共々先生を囲んでの祝杯を上げる事が出来なかった事である。お電話でお祝いを申し上げたら、大変お喜びで、何時までも気に掛けていただいてと、ご丁重なるお礼を云われた事であった。

先生がご退官になられる直前、話された事が今でも印象に残っている。それは先生が学生時代（中学か旧制高校時代のことだろうか）陸上競技をやっておられた時のお話であった。普通の人は、かけっこでゴールの線を見ると力が自然に抜けてゆくんだが、陸上競技をやっていると、ゴールは全力で駆け抜けるようにトレーニングをする。ゴール前で力を抜くのと、ゴールを見れば全力で駆け抜ける、のでは結果が大違いである。私は、退官と云う一つのゴールラインを全力で駆け抜けて、そのまま走り続けるんだ、と。ご退官のご年齢になられて、尚陸上競技で鍛えられた先生の面目躍如足るものがおありであった。

どうか天国から、多くの後輩たちの行方を暖かくお見守り下さいますようにお祈りして筆を置きます。

合　掌。

追悼文受付日：平成 29 年（2017 年）7 月 1 日　赤川先生－32

事務局注記：

赤川研究室の卒業生以外に、赤川先生と所縁のある方々へも追悼文の呼び掛けを致しておりました。本件は、坂口先生からの呼び掛けに応えて、お寄せ頂いた追悼文です。事務局として感謝しながら拝受いたしました。

以上